



瀬沼茂樹

日本文壇史  
20

漱石門下の文人たち

講談社

日本文壇史 XX

(新装版)

漱石門下の文人たち

昭和五十四年三月二十日 第一刷発行

定価 八五〇円

著者 瀬沼茂樹

装幀者 小松桂士朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号 一―二―二  
電話東京(〇三)九四五―二三(大代表)／振替東京八―三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Shigeki Senuma 1979, Printed in Japan

# 目次

## 第一章

岡本綺堂と二世市川左団次——東京毎日演劇会——その新歌舞伎劇  
——『修禪寺物語』——『箕輪の心中』——岩野泡鳴の西大久保の  
同棲生活——『放浪』続篇『断橋』——大阪新報社と大阪移住——  
喜劇『閻魔の眼玉』——遠藤清子との池田生活——小川未明と近松  
秋江

## 第二章

田山花袋の転機——向島の小利（飯田代子）——花柳小説『髪』の  
成立——神津猛と藤村・花袋——釈宗演——第三短篇集『食後』の

成立——へボン館炎上——へボンの死——臨川・薫と箱根塔の沢行

### 第三章

壺

大貫晶川と谷崎潤一郎——その結婚と藤井とし子——その急死と遺著——大貫かの子——新詩社の新進歌人——岡本一平との結婚——伏屋武龍のこと——第一歌集『かろきねたみ』——小山内薫——岡田八千代——中川登女との結婚——長篇『大川端』

### 第四章

六

近松秋江の未練——大貫ますの家出——日光探索——岡山行——漱石の日記——谷崎潤一郎の初陣振——『三田文学』の発売禁止と上田敏——永井荷風の評論——長崎の旅——塾当局による内閣——水上瀧太郎の諷刺戯曲

## 第五章

六九

瀬沼夏葉と尾崎紅葉とケエベル——アントン・チェホフ——シベリ  
アの女ひとり旅——夏葉の見たロシアとロシア文学——アンドレー  
エフ訪問

## 第六章

一〇

牧水・夕暮時代——創作社の新設——小枝子への執着——放浪の旅  
——牧水啄木を見舞う——土岐哀果と「作り易い歌」問題——第四  
歌集『路上』——『詩歌』創刊——処女歌集『收穫』——栢野志け  
と結婚——夕暮の新婚の家

## 第七章

一五

若山牧水——創作社の解散——横浜の放浪生活——やまと新聞入社

## 第八章

——鳩山春子の愁嘆と啄木——探訪記者——『牧水歌話』——信州の旅——太田喜志子と再会——喜志子の半生——島木赤彦と中原静子——『自然』の創刊——牧水の結婚

一五

鈴木三重吉——『小鳥の巢』——成田中学——同盟休校——海城中学——新婚生活——青木健作——評論家として出発——成田中学教頭——新進作家——結婚

## 第九章

寺田寅彦の帰朝——漱石訪問——高知帰郷——留学時代——ベルリン——ロンドン——ゲッチンゲン——中勘助——入営と入院——兄金一の錯乱——野尻湖独棲——和辻哲郎——第一次・第二次『新思

一六

潮——高瀬照

## 第十章

阿部次郎の彷徨——『五人集』——初恋の女——婚約——魚往影雄、  
藤村操——長沢一夫——依田定尾——宿南昌吉——処女小説『親  
友』——宿南八重子と竹沢恒子——自然主義批判——安倍能成——  
評論集『影と声』出版——『野尻湖日記』——『長兄』と安倍任重

107

## 第十一章

夏目漱石の哀愁——雛子の死——『彼岸過迄』——池辺三山と鳥居  
素川——三山の急死——『明治維新三大政治家』——『雨の降る  
日』——中村古峽の『殻』——正宗白鳥の『生霊』——杉村楚人冠  
——古峽の悲劇——『回想』

108

長谷川伸——横浜毎朝新聞——都新聞——中里介山——平民社  
慈育学校——火鞭会——『小さき理想』——大塚甲山——『今人古  
人』出版——都新聞——『氷の花』——『高野の義人』——『島原  
城』——『室の遊女』

あとかぎ

## 参考文献

索引

# 日本文壇史

——漱石門下の文人たち



# 第一章

## 1

岡本綺堂と二世市川左団次——東京毎日演劇会——その新歌舞伎劇——『修禪寺物語』——『箕輪の心中』——岩野泡鳴の西大久保の同棲生活——『放浪』続篇『断橋』——大阪新報社と大阪移住——喜劇『閻魔の眼玉』——遠藤清子との池田生活——小川未明と近松秋江

## 第一章 第三

綺堂岡本敬二は、長年手稿を温め、推敲を加えていた『修禪寺物語』を、明治四十四年一月、このころ半ば演藝雑誌の観のあった『文藝倶楽部』に発表した。石橋思案が編輯者として発表を慫慂したからである。しかし、あまりに近代的にすぎるため、脚本としての評判は馨しくなかった。五月に入って、二世市川左団次一座の手で、明治座で、中幕として上演された。綺堂は前年一月の『承久絵巻』の上演から、左団次との間に提携ができ、専ら左団次にあてて書くようになっていた。左団次の夜叉王は格別の出来栄で、彼の俳号から採った『杏花戯曲十種』のひとつに数えられるようになる、綺堂もまた戯曲家として不動の地位を確立した。

綺堂は直参旗本の家の長男で、父純きよし（初め敬之助）が求古会の会員として九世市川団十郎を後援していたので、明治十七年、数え年十三歳の頃から茶屋を訪ね、演劇に関心を深めていた。父が事業に失敗したため、十九歳で日就社の見習記者になり、劇評を書き、翌年、日就社の福地桜痴の指導で、劇作を習った。中央新聞、絵入日報、やまと新聞、東京日日新聞などに勤め、日露戦争には従軍記者として満州にわたったが、劇評の筆を絶たず、また劇作の習作にしたがった。従軍から帰って、演劇記者の仲間、右田寅彦、栗島狹衣（朝日）、岡鬼太郎、岡村柿紅（二六）、伊坂梅雪（時事）、杉賈阿弥（毎日）、鹿島桜巷（報知）らと、文士劇「若葉会」を組織した。翌明治三十九年六月、「若葉会」は東京毎日新聞の経営に移り、「東京毎日演劇会」と改称した。そんな関係から、綺堂は、鬼太郎、狹衣らと、毎日新聞社に入った。十二月、綺堂作の『新羅三郎』を、明治座で、演劇会第一次公演として上演、綺堂も俳優の鑑札をうけて、舞台に立った。毎日演劇会が明治四十一年末に解散するまで、公演は六回を数え、綺堂は主に二枚目風の立役に扮していた。

三度目の外遊から帰り、俳優から興行師に転じた川上音二郎は、同じく外遊から帰り、先代歿後の悲境にあった二世市川左団次と結んで、革新興行を企てた。東京、大阪、京都、名古屋、神戸、広島の安い小屋をチェーン式に結び、安い俳優を傭い、安く芝居をみせる趣向であった。綺堂は音二郎の依頼で『奇兵隊』『白虎隊』を書き、併せて一つにし『維新前後』（明治四一・九、今古堂刊）と

改題した。それは明治四十一年九月に、左団次によって、上演された。後篇の『白虎隊』が殊の他に好評で、綺堂の出世作となり、同時に左団次の出世藝となった。二人は壮士俳優と軽視されていた川上音二郎の才覚で、それぞれに出世の糸口をつかむとともに、後の提携の機縁をもひらいた。

綺堂は初め狂言綺語から狂綺堂または狂堂と称していたが、数え年二十七歳から綺堂と署名し、歌舞伎劇の内部から漸進的に改良進歩を加えていった。坪内逍遙が演劇の改良を考え、語りもの的要素、主意の不徹底、性格の不一致等の欠点を除去しようとした後を承けて、劇場用の脚本の近代化へ一步をすすめたいと考えていた。彼の生いたちや演劇界への親しみから、強い慣習や伝統に支配された演劇界の内部にあって、その圧力の並々ならぬことを熟知していた。だから、劇壇を長く支配できるのは史劇であると考え、これに力を注ぎ、人物、主題、構成、舞台技巧に合理化を加え、『承久絵巻』でいち早く現代語をもちい、文体の改革をも断行した。綺堂は考証によって時代の雰囲気を再現しようとするとともに、人間の劇的葛藤に合理性と近代性とを導入して、近代の思想を生かす工夫をめぐらした。父が英国公使館の書記を勤めていた関係から、幼時から公使館に出入し、近代生活の感情・思想にも親しむところがあり、時代感情に無理のないものを工夫した。『修禪寺物語』はその第一歩であり、慎重に事をはこんで、成功した。

綺堂は、明治四十一年九月末に、新聞社から、遅ればせながら、暑中休暇をとって、麴町元園町

一丁目の自宅を離れ、伊豆の修善寺温泉に出かけ、養気館こと新井旅館に泊った。二十五日は雨に降りこめられ、所在なく早寝をしたので、翌二十六日は早朝に眼をさました。源三位頼政の妻菖蒲の前が、頼政の滅亡後、故郷の豆州河内村の禅長寺に身をよせ、時折訪ねてきて入浴したという伝説のある菖蒲の湯に入浴した。朝食をすませて、宿から西北へ五、六町、小山にある源三河守範頼の墓に参った。晴れると、芭蕉の「木曾殿と背中あはせの寒さ哉」ではないが、菖蒲殿と背中あわせの暑さに驚いて、宿に帰った。午後、ふたたび宿を出て、肖廬山修禅寺に参詣した。それから境内に老杉の多い日枝神社に詣でた。石段の下に修善寺駐在所がある。範頼が火を放って自害した真光院はこのあたりにあった。あの老杉のうちには、滅び行く源氏の運命を眼のあたりみたものもあったらうと、思った。

翌二十七日、桂川にかかった桂橋をわたり、指月ヶ丘の麓に出た。この丘は、頼家が討たれたとき、母政子の尼が空ゆく月を仰ぎ、「月は変らぬものを、変り果てたるは我子の上よ」と、泣いたという伝説から名づけられた。政子が頼家の仏果円満を願って建立した釈迦堂があった。小高い丘には、高さ五尺あまりの楕円形の大石があり、征夷大將軍左金吾頼家尊霊と刻まれていた。頼家は焼けた堂のなかに祀られ、その軒には笹龍胆の紋をうった古い紫の幕があった。綺堂は香華を手向けて帰った。その翌日もまた墓参に行った。何かにとり憑かれたように、二度も出かけた。丘の下

の三州屋という蒲焼屋からは賑かに三味線の音がきこえてきた。

綺堂は話好で劇通の宿の主人から修善寺案内記を借覧し、また修禅寺の宝物のうちに、木彫の真黒な大きな舞楽のものらしい頼家の面おもてのあることをきいた。頼家その人の面貌を似せたものではなく、頼家の所蔵品のようであった。しかし彼はその面と頼家とを結びつけ、薄命な貴公子の昔をしのび、さまざまな感慨にふけた。誰がその面を作り、どういう人の手から頼家の手にわたったのか、職人画の絵にある昔の職人の姿を眼前に思いうかべ、それを眺める頼家の姿を想像した。

頼家が修禅寺に幽閉されたとき、ひとりの若い妾を連れていた。その妾は頼家の討たれたときにひそかに脱出して、大仁への坂路にかかった。その時後をふりかえり、二度とこの坂を越えることはあるまいと嘆いた、という不越坂こよしざかの伝説を、綺堂は思いだした。また重病の美人の妻が絶息するときに、妻の顔を筆紙に写したという、能役者の金剛右京の伝説（金剛流に伝わる楊貴妃の面の伝説）を思いだした。

さらにまた喜多古七太夫の伝説を思いだした。古七太夫は上方へのぼる途中、江戸に残した小児が病死したときと、すぐに引返した。わが家の門に入ろうとすると、乳母が奥から走り出てきて、半狂乱になって、袂に取付いたので、押退けると、彼女は倒れた。乳母が倒れたとき、能楽『藤戸』の仏ころびで、海士の母が「人目も知らず伏し転び、わが子返させたまへや」と狂い泣く

形を思いだし、夢のさめた感じがした。わが子が死に、乳母が泣き狂い、『藤戸』の妙所を悟った。古七太夫は藝の虫らしく、思わずほえんで、わが児を孝子と褒めた。この二つの話で、『修禪寺物語』一幕の筋ができあがった。

綺堂は元園町の自宅に帰ると、面を主題とするため、面作師おもてうしのことをいろいろと調べた。源平から鎌倉時代にかけて、面の十作の時代であった。頼家の面は、その十人の一人の作ではないかと考え、越前大野郡の住人に夜叉という名の名人があつたので、これを伊豆の住人とし、伊豆の夜叉王とした。夜叉王の作る面が単に舞楽の面ではつまらぬので、頼家の顔に似せて彫らせることにし、彫っても彫っても死相が現われることにした。金剛右京の伝説から、夜叉王に死のうとする娘の顔を写生させ、そこに藝術家魂を生かして躍如と現した。この非情ともいふべき藝術家魂に近代精神を伝えるつもりであつた。『修禪寺物語』一幕三場は四十二年の三月に脱稿した。その筋は簡単であつた。伊豆の面作師夜叉王が將軍頼家の依頼で面を打つが、いくら打つても面に死相が現われた。催促にきた頼家は、姉娘かつらを見染め、夜叉王には氣に入らぬ面を満足して持帰った。北条の討手が頼家の館を襲い、頼家は斬死した。かつらは身代りに面をつけて、血まみれになって帰ってきた。面に現れる死相は頼家の運命を暗示していたとわかり、夜叉王は満足した。妹娘かえでの中で落命するかつらの相貌を、後の世の手本に写生するのであつた。